高等研究院フォーラム2007「若手研究者の育成とテニュアトラック制度 －これからの大学人事改革を考える－」を開催

高等研究院フォーラム2007が、11月30日（金）、IB電子情報館大講義室において開催されました。

同フォーラムは年１回程度開催されており、今回は「若手研究者の育成とテニュアトラック制度－これからの大学人事改革を考える－」をテーマとして、大学関係者、研究者、大学院生、一般の方々など全国から約130名の参加を得て開催されました。とくに若手研究者の養成・確保がますます重要になってきている近年、創造的かつ競争的な研究環境を実現し、能力のある若手研究者の意欲を高めるとの観点から、人事透明性の高いテニュアトラック制度の導入が不可欠であるとの認識が広がっています。こうした中、平成18年度に文部科学省は科学技術振興調整費「若手研究者の自立的研究環境整備促進事業」を開始し、世界的研究拠点を目指す研究機関において、テニュアトラック制度を導入する試みを支援しています。本学高等研究院のプロジェクト「高等研究院研究者育成特別プログラム」はその一環として採択され、現在、本学を含め全国の21大学がこの事業によりテニュアトラック制度の導入を進めています。テニュアトラック制度は、人材の流動化が進んでいるアメリカ社会ではうまく機能していますが、日本の大学社会に根付かせるためには、様々な配慮や工夫をする必要があります。こうした背景のもとで、テニュアトラック制度の確立および定着における問題点、研究支援と研究評価のあり方などについて多様な視点から意見を交換し、これからの大学の人事改革のあり方を見出す機会となるよう今回のフォーラムは企画されました。

フォーラムでは、山本理事のあいさつの後、４名の講師による講演が行われました。最初に、高比良幸蔵文部科学省科学技術・学術政策局人材政策企画官が、近年のポストドクター等の雇用状況や進路動向を踏まえた上で、若手研究人材のキャリアパスの一部に位置づけられているテニュアトラック制度の重要性とそれに対する期待を述べました。続いて、近藤高等研究院長および柴田治呂東京農工大学若手研究支援室長が、本学および東京農工大学のテニュアトラック制度の進捗状況と今後の展開についてそれぞれ紹介しました。引き続き、菅　裕明東京大学先端科学技術研究センター教授が、米国のテニュアトラック制度について自身の体験談を紹介した上で、日本に適したテニュアトラック制度のあり方について提言を行い、切磋琢磨型アカデミズムの形成における限りなく公正な審査の重要性を強調しました。また、日本の競争的研究資金の問題点に関連して、テニュアトラック制度の導入は、「同時に多くのシステム改革を推進しなければならない」と問題を提起しました。

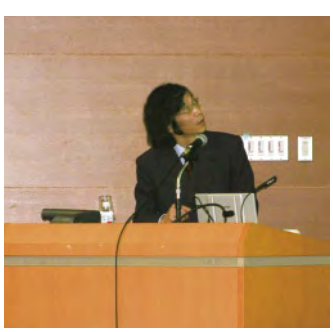
会場の様子

それに続くパネルディスカッションは、大塚　進科学技術振興機構科学技術振興調整費業務室副調査役と高橋雅英本学医学系研究科教授の２名がパネリストとして加わり、坂神高等研究院副院長の司会の下で進行されました。まず、同フォーラムの前に実施した高等研究院テニュアトラック教員宛ての匿名アンケートで提起された、教員側から見たテニュアトラック制度への意見や要望に基づき、現制度の問題点などについて議論しました。その後、若手研究人材のキャリアパスの形成に関連して、今後の大学人事改革ついて展望しました。最後に、奥村高等研究院副院長が全体の議論についてまとめ、閉会の辞を述べました。

フォーラムに引き続いて行われた懇親会では、パネリストの方々に加え、学内外の多くの方々が参加し、活発に議論する姿なども見られ、大変有意義なものとなりました。

講演する近藤高等研究院長

講演する高比良文部科学省人材政策企画官


講演する柴田東京農工大学教授

講演する菅東京大学教授